

臨地実習における看護学生の自己調整学習

—回顧法による看護師への調査から—

三井弘子

社会情勢の変化などによって将来予測が困難な時代となり、そうした社会で生き抜くためには、従来の教師から学習者への一方的な受け身の授業ではなく、学習者が主体的に学習する態度が求められている。主体的な学びは、もはや初等中等教育だけの課題ではなく、高等教育も同様である。学習者が学習に能動的に関与するとした自己調整学習の理論は、学習に対する主体性や学習意欲を高めるといった教育の課題に対して有効であると考えられている。

看護師養成課程においては、講義、演習、臨地実習という授業形態があるが、中でも臨地実習は、知識、技術、態度の統合の場として位置づけられ、重要な学びの場とされている。本研究は、看護学生の臨地実習における学習行動を自己調整学習の理論枠組みを用いて明らかにすることを目的とする。しかしながら、2019年以降の新型コロナウイルス感染症の流行により、近年、看護師養成所において、病院施設等における臨地実習の実施が困難であることから、本研究の対象者を看護師養成所卒業後5年未満の看護師とした。また、回顧法であることを勘案して対象年齢を22歳から45歳とし、調査参加者の募集、調査の実施・回収をリサーチ会社に依頼し、Web上で実施した。使用した尺度は、Iyama & Maeda (2017) が作成した「看護大学生の臨地実習における自己調整学習尺度」(Self-Regulated Learning Scale in Clinical Nursing Practice : SRLS-CNP) をもとに内容を検討し、一部項目を追加して作成した。

調査参加者は107名で、平均年齢は32.58歳であった。探索的因子分析(最尤推定法、プロマックス回転)の結果、動機づけ関連では、「興味・関心」、「遂行目標志向」、「実習不安」の下位尺度が抽出され、モデルの適合度は問題なかった。学習方略では、「協働学習」、「認知方略」、「メタ認知」、「努力コントロール」といった下位尺度が抽出され、モデルの適合度は問題なかった。構造方程式モデリングを用いたパス解析では、「興味・関心」と「実習不安」は、「協働学習」、「認知方略」、「努力コントロール」に有意(いずれも $p < .01$)な関連が見られたが、「遂行目標志向」は「メタ認知」とのみ有意($p < .01$)な関連が認められた。今回の調査から、看護学生の臨地実習において、「協働学習」、「認知方略」、「メタ認知」、「努力コントロール」といった学習方略が、「興味・関心」、「遂行目標志向」、「実習不安」といった動機づけから有意な影響を受けることが明らかとなった。